

第4章

各地のたより

《関西OB会だより》



古希のお祝い—創部70周年記念に寄せて—

昭和48年卒

上野 利

Toshizou Ueno



齢70は古来稀なり。慶応大バドミントン部も古希といわれる年になりました。お祝い申し上げます。現役時代に主将として30周年を迎えたことが昨日のように頭をよぎります。その時記念歌と部歌ができましたが、現役のだれかが詞を作っては、と言われそのうちの1つを歌心もないままに作詞をしました。それからあつと言う間の40年です。去年は久しぶりに数曲の作詞をし1つを記念歌に提供させていただきました。10年前の60周年記念誌には鬼籍に入られた諸先輩の事を思い出すままに書きつづりました。森友さん(日本バドミントン協会理事長。常にこやかで包み込むようなお人柄)、吹野さん(監督時代リーグ戦で敗れ丸坊主になられた伝説の熱血漢)、李家さん(3年生の時札幌での東日本大会で複ベスト4に入り大

きなカニを御馳走になった事)、大島(金原)さん(前々幹事長。試合で負けると目黒のご自宅に電話し酒をおごってくださいり何度も泊めていただいた事)、岡本さん(4年次の監督。銀座の呉服屋を経営され、そこでの打ち合わせを終えると飲みにお連れくださった気さくな方)、佐藤さん(1年生のときの主将。休日ごとに日吉のアパートに伺った事。就職されて間もなく交通事故で車イス生活に。記憶が遠のかれておられたとお聞きし入学1年目の富士鉄釜石での夏合宿後に浄土ヶ浜でともに撮った写真を思い出にお送りした)などです。私自身5、6年前に母と妻を相次ぎ無くし人生の転機を悟りました。いわば子連れおおかみ、といった状況ですがなお凝りもせず果てしない学問の荒野をさまよい続けています。

しかし思い出というものは悪いものは消し去って良いものだけが浮かんで来てしまうものです。なるだけ苦い経験も思い出すようにします。思い返すと3年生の時に仙台でのインカレ団体戦で日大とベスト8入りをかけて対戦した時に、シングルスでインカレ1位の遠藤君と対戦し勝ったのが私のピークでした。翌年の東日本大会では準決勝で彼に敗れてしまいます。後者は記録に残っていますが、前者は記録に見えません。彼とは高校時代、福井国体の3位決定戦の中でシングルスで敗れた苦い経験がありました。3年越しの雪辱戦でした。その4カ月後慶応大の受験に臨み、3月上旬には日吉で練習に入り、草薙の春合宿に参加しています。その年は東大の入試が中止になるという記念すべき珍事が起こっています。そのためわざわざ1浪した同級生がいました(お茶大の日本

中世史の教授)。入学式前の春合宿にそなえた日吉の練習では慶応の部員の方々には初お目見えでしたが、同じバドミントンをする人達は皆仲間という感覚をもっていましたから、違和感はありませんでした。長距離走は得意でしたから練習前の遠出のランニングでは、最も速いといわれる4年生の方を失礼ながらおいて先を行きました。受験生といっても国体後は奈良県民体育大会にぜひでも出て母校の優勝の記録を残しておきたいという気持ちが強くありましたから、12月までは練習を積んでいました。前年の近畿大会では単複に優勝しましたが遠距離走は好きでほとんど欠かしたことはありませんでした。空白は受験時代の2カ月ぐらいで、体力は温存していました。その12月10日に慶応の吉田監督が自宅に来られ受験を決意しますが、他には立教大と法政大から熱心に勧誘を受けました。後にインカレ1位になる谷口君とは受験中ずっと同宿し、ともに慶応と立教を受けましたが、別れ別れになりました。下宿を訪問し合い交流は続きバドミントンを仕込んでもらいました。最も仲の良かった好人物です。

1年のときの納会で私は、諸先輩・OBの方々を前にして、今の週休2日の練習態勢では強くなれない、ライバルたちは強い大学に入り、練習量も豊富であるのに、弱い我が校が練習量が少なくでは何故彼らに勝てるのでしょうか。こういう伝統は直してもらいたい、と生意気にも言ってしまいました。この時我が校はリーグ1部6位でしたから、いわば崖っぷちにいたはずなのに、意識は旧態依然で、入学仕立ての私にはなじめないものがありました。普段は練習に没頭する私が、体ではなく口で自己主張をし押し通した事はもう1つあります。4年になる前に主将を決める段階になり、それまではなぜかOB会が決定権をもっていました。それは現役の考えを軽んじるものである、なんとか自分たちのクラブのリーダーは最も身近にいて、よく知っている自分たちで決めなければならない、という事を皆に説きました。不思議に古い規約がどこからか出て来て、監督の岡本さんに見せたら、よしいだろう、という事になり、長年の旧弊は取り除かれました。ただし、卒業後すぐに耳にしたところでは、後輩たちがマージャン屋でお前が次の主将をやれよ、と言い世論形成をしているというので直ぐに現役たちに対して今までの経緯を説明しました。結局、前幹事長君が主将に選出されましたが、そういう事があれば、又振り出しに戻ってしまうからです。1年の期末試験の時にトーマス杯(世界選手権大会)の合宿が日吉で行われるので慶応

のだれかがいなければならない、上野に決定だな、の一言で、後に起こる不幸があるとも知らず、渋々、しかし興味津々参加しました。早稲田のOBの福井さんが監督で、中央大学出身の秋山さん(全英選手権、今言う世界選手権2位)、小島さん(全日本連続1位)、本間さん(2年からインカレ1位)、日大の杉山さん(4年で本間を破りインカレ1位)、法政大の池田さん(後に世界複3位)などそうそうたる構成でした。もちろんおまけの私もときには参戦しました。杉山さんに8ラブとリードしたところまでは覚えています。なお福井さん(当時(株)川崎ラケット社員)とは高2の時に近畿大会で知り合い、5厘刈りの丸坊主頭で試合に臨んでいた私は、日本の女子はどうか、と生意気にも言ってしまいました。日本の女子チームは当時世界1位を独占し続けていました。そのメンバーだった湯木さん(歌手新沼謙二の奥さん)は昨年他界されました。福井さんは女子の監督も務められた事があります。なお10歳上のOBで私を鍛えてくださった宮永さん(3年次の監督。日本選手権・複3年連続1位)はその後のトーマス杯監督を務められた。大垣の合宿で2対1を通して2時間半毎日続けられた時はさすがに降参しました。当時も今も感謝しています。

3年に上がる直前の野田の合宿では自らに苛酷な宿題を課して臨みました。重点的な課題はスタミナの増強とフォームの改造でした。毎日練習後に中田君(2年)あるいは笹岡君(1年)を伴い1時間走りました。今のラリーポイント制と違い、1点を取るのに何度もサービス権を奪い返さなければならなかったころのバドミントン競技は、本当につらいものがありました。走った後は夕食でご飯を18杯お代わりした記憶があります(体重計で2、5キログラム分)。高2時代に県内のインターハイ予選で、全国2位になる人と1時間50分を戦ったのが最長です。スポーツの中で最も心肺能力と脚力が要ると、あるスポーツ科学者は言っていますが、事実かも知れません。

部長の平良先生(1昨年他界)はほとんどの合宿に来て下さいました。英米法は分かりませんが在学中最も気楽に研究室を訪問できた先生でした。先生の父親は何をされておりましたか、と尋ねると高校の校長みたいな事、と言われましたが、実は東大の学長で有名な「新人会」を創設し束ねた方です。

大学2年の時に書いた「推古朝前夜の政治史的背景—蘇我馬子の崇峻天皇暗殺事件をめぐって—」が翌年の『政治学論集』(政治学科ゼミナール委員会)に掲載され(半分は日吉の夏合宿中に2段ベッドの上で書きました)、3年次

に道をこの方面に決め恩師に入門します。この事は部員のだれにも言ってはおりません。私の針路を疑われた向きも多かったろうと思います。恩師は平先生から私の事を聞かれて、君は主将だそうだから勉強は引退してからにしよう、という事でした。この恩師が後年までいわれたのが教養の英語がCであったということでしたが、実はトーマス杯の合宿参加のためこれらの試験の準備が全くできなかったのもそれぞれレポートを提出して切り抜けました。英語は小学生のころからラジオ英会話を聴いており、高1の時にスピーチコンテストで3位になりますが、その1週間後近畿大会があり、複4位に入りました。どちらも中途半端でした。

なお不思議な縁で昨年、蘇我馬子に立ち戻り彼の墓が石舞台古墳である確証を突き止めました。今飛鳥ではそれが話題になっています。研究の中心は近代史にシフトしましたが(グーグル・ヤフーで検索するとだれかがまとめた拙著が全部出てきます)、先祖返りのような、やはり古代史が好きなのだ、と実感します。私の実家は平城京の真南、古道中ツ道の沿道にありその延長線上に藤原・飛鳥京があることが刺激になっているのでしょう。

5年前に文部科学省科研費特別研究領域を

終えて報告集に長崎の出島の科学というテーマで鉄棒とバドミントンの歴史に触れました。狭い島での健康管理にうってつけのスポーツですが、どうみても羽根打ちをしているのはオランダ人ではなく、色黒のアジア人です。ジャカルタにオランダの会社がありましたので彼らはインドネシア人である事はほぼ確かです。バドミントンが今もこの国の国技であるという事実は歴史が物語っています。17世紀の出島絵図その他から、出島という限られた地域ではありますがバドミントンが日本に伝わったのが相当早かった事、またオランダ人にはなじみがなくアジア人系のスポーツであった事が推測できます。

いつも現役の動向に関する情報をいただいておりますが、遠方で小回りが利きません。そちらに伺えないのが残念ですが、心はいつも日吉を向いております。かがやけ、未来(あした)をつなぐ若者たち、の記念歌は私の思いを刻んでおります。本当に我が部はよく続いたものです。おめでとうバドミントン部。またこれから80年記念に向かって一步を踏み出すことでしょう。思い出話はキリがありませんのでこの辺でお開きとします。

慶応義塾体育会バドミントン部 70周年記念の歌

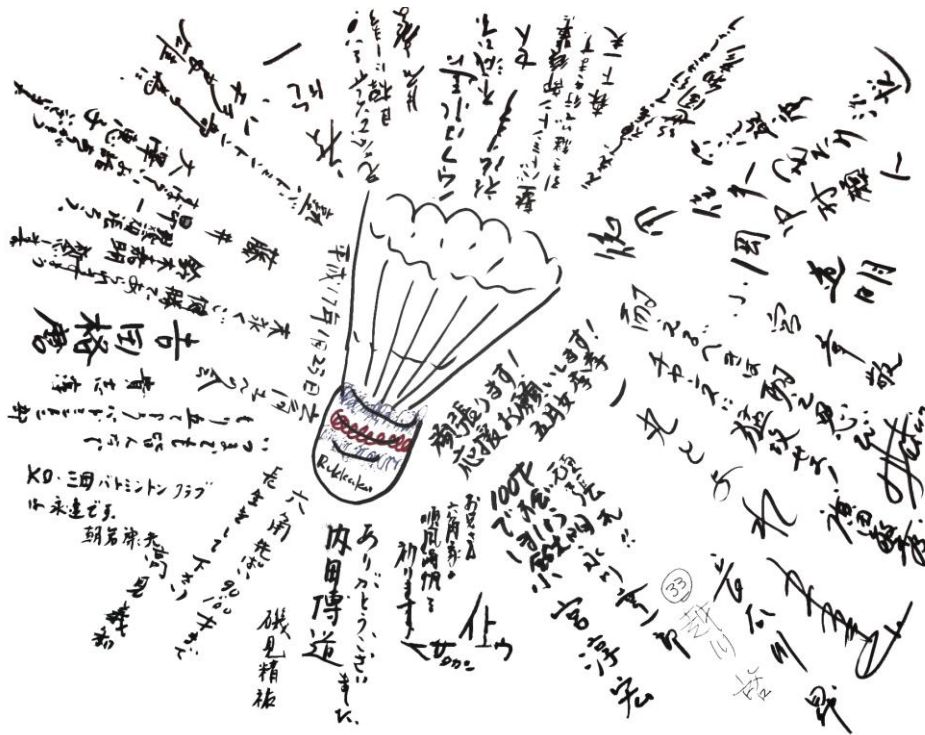
上野 利三 (作詞)

古希をむかえた われらがクラブ (♪)
いまひらこう 未来(あす)へのとびらを (♪)

1 かがやく あすにつなごう おのこたち
むかおう あさひのかなたに
ささげよ ましろき シャトルコック
みよ 大地のそのように たくましい心もて
ひよしのおかの きたいの 星たちよ

2 うつくしい あすがまっている なでしこたち
ほほえむ あかるいひとみ
かかげよ シャトルコック むねに抱き
みよ 青空のような すんだ心もて
ひよしのおかの きよき 星たちよ

3 ほほえみ あすにむかおう 先人たちと
きぼうを むねに一步ずつ
かける グランド さくらばな
みよ 大空のように ひろい心もて
ひよしのおかの つよき 星たちよ



第1回邂逅会 平成17年1月23日寄せ書き

～慶應義塾体育会バドミントン部70周年記念誌に寄せて～
『人生最良の選択！』



平成2年卒 喜多 和夫 Kazuo Kita

バドミントン部創部70周年おめでとうございます。諸先輩方が綿々と築いてきてくださり、後輩が肅々と引き継いでくれているからこそ達成できたことだと思います。その伝統ある部の歴史に自分も4年間参加することができたことをとてもうれしく思います。人生はそれぞれ決断の連続で成り立っているのですが、自分のこれまでの決断の中でも「体育会バドミントン部入部」は傑作のひとつであったと今更ながらふりかえる次第です。奈良の田舎から1年浪人して慶應に何とか合格し、体育会の重み（練習の大変さ？）も知らずに入部した自分が、これほどまでにその選択を自画自賛するようになるとは当時は考えもしなかったのです。インターハイに出場したとはいえ、浪人ですっかりバドミントンの勘も鈍っていた自分を部に引きずり込んで下さった岩田先輩（S63卒）には今でも感謝しています。

●ひとつの目標に向かってチームが一丸となることの楽しさ

【バドミントンは個人競技だが、「春秋のリーグ戦・慶早戦」はチームとしての戦いとなり、個人の結果を超えてチームとして勝利の喜びを味わうことが出来た】

●チームの中での自分の役割を自覚し、それを果たしていくことの大切さ

【学年が上がるにつれて、同期もそれぞれが自分の立ち位置をつくっていったように思う】

●最上級生（リーダー）が信念（軸）をもつことの大切さ

【自分たちの代がどのようなチームを作りたいかを決め、同期で団結していかなければ、結果を出せなかったと思う】

●懸命にやった後だからこそ味わえる乾杯の美味

【特に勝沼合宿の打ち上げはすさまじかったように記憶している】

●生涯付き合っていける人生の先輩、仲間、後輩との出会いの素晴らしさ

【何かが始まるきっかけは人との出会いで

あることが多いような気がしています】

など、社会人になってもそのまま通用する多くのことを自分はバドミントン部中心で過ごした大学生活を通じて学んだと思います。そのような“場”を経験できたことに感謝し、小杉会長が言われた「決して自慢はしないが、心の中で慶應卒・体育会バドミントン部卒のプライドをもって」これからも頑張っていければと思います。

7年ほど前に関西（奈良）に戻り、関西OB会を盛り上げていく立場にありながら、まだこれ

までOBとして十分な動きができておらず申し訳なく思っています。これから関西OB会としても地方の有望選手発掘・獲得などの面で実績をあげていくべく関西在住OBで協力・活動して参りたいと思いますのでよろしくお願い致します。

そして、OB個人としては再び「●●年ぶりで慶早戦勝利！！」の文字が踊り、現役・OBが入り乱れて勝利の祝杯をあげることができるのを楽しみにしている次第です。頑張れ、現役！
以上



慶應バドミントン部OBとして@関西

平成10年卒

川野

Takehisa Kawano

今年で塾バドミントン部は70周年。卒業してほどなくして迎えた60周年にあたって寄稿したのはつい先日のことのように感じるのだから不思議なものだ。あっという間に思える10年ではあるが、私自身の生活にも様々な変化があった。6年前に転勤で神戸に移り住み、4年前には結婚もした。しかし10年前も今も変わらないのは、週末に時間がある時には趣味でバドミントンをプレーしているということである。

関東圏内でも何度か転勤などで引越をし、そのたびに地元のバドミントンサークルですぐに仲間ができた。神戸に引っ越して来た時も友人のついでで顔を出したバドミントンチームに暖かく迎えてもらい、今でもお世話になっている。バドミントンという共通の趣味を持ってい

るだけで年齢や職業、性別を超えてすぐに仲間になれるのは、本当にこのスポーツの素晴らしいところだと思う。

関西に来て以降、実は自分の中で「慶應バドミントン部出身である」ことを意識することが多くなったのではないかと感じている。もちろん誰かに聞かれなければ出身校を自分から言うことはないのだが、ひょんなことで慶應出身だと知られた時のために、「慶應の名に恥じないようになければ」と無意識に意識してしまっているようである。

何より関西では関東に比べて相対的に慶應出身者が少ない。ましてやバドミントン部OBで今でもプレーを続けているのは数えるほどではないだろうか。そんな環境の中では、私個

人のイメージは相手の中での慶應義塾、もしくは慶應バドミントン部のイメージに直結する。責任重大というわけだが、私はむしろそれをポジティブにとらえていて、最近では「さすが慶應のバドミントン部は違うなあ」と相手に思わせることに密かに挑戦している。

何が「さすが慶應」なのか？それは人それぞれ違うだろうが、私の中での第一の要素は、品の良さである。義塾の目的のひとつに「気品の泉源」とあるが、やはり塾OBたるもの、品行には気をつけたいものである。マナーと言いかえてもいいかもしれないが、ずる賢いプレーや相手を馬鹿にした態度などは絶対にしないようにしている。

そして私がさらに重要と考える要素は、「頭を使う」ことである。文武両道を標榜する塾体

育会OBとしては、単にバドミントンが強いだけでなく、いかに頭を使ってプレーするかが重要であると思うし、個人的には、年々運動能力が衰え行く中でゲームに勝つ唯一の方策であると考えている。しかし対戦相手や観衆に「頭を使っている」と思わせるのはそう簡単なことではないし、相手がそう感じているかどうかは結局はつきりとはわからないものなのである。

結局のところ孤独な挑戦というわけであるが、関西で私と知り合いになった方々の中に慶應バドミントン部に対してポジティブな印象が芽生えることを願いつつ、楽しみながらバドミントンを続けてゆくことで、微力ながら慶應義塾体育会バドミントン部に貢献してゆきたいと思う。



《東海OB会だより》



『体育会の神話』

昭和50年卒

佐々木 祐一 *Yuichi Sasaki*

私は1971年(昭和46年)に慶応大学工学部に入學した。入学間もないある日のこと、日吉のイチョウ並木を歩いていると、突然誰かに声を掛けられた。「あれれ、佐々木君じゃないか…」見ると、高校時代愛知県でバドミントンのライバル校だった東海高校の横井君、桑原君であった(私は時習館高校出身で、女子では6年下の後藤さん、現役では前川君と同じ)。話を聞くと、大学でも早速バドミントンを始めているらしい。私はというと、とにかく初めて家を離れて一人になった解放感と、この先の新生活への期待で胸一杯ではあったが、部活など特に何をやるって決めていたわけではなかった。それからしばらくして、下宿先の日吉台学生ハイツに、鈴木主将と上野先輩が訪ねてこられた。私はすっかり恐縮してしまい、っていうか、お二人の姿をみて、体育会ってなんかカッコいいって思ったのかもしれない。その後すぐに入部を決めた。同期には桑野、横井、桑原、野村君らがいて、後から川中、青田君らが加わった。

1年目の思い出は何と言っても大垣での夏合宿である。前の年の早慶戦で大敗を喫したとかで、その年は何としても挽回せねばということでOBの方々の指導も大変情熱的なものだった。私はまだレギュラー以下だったので、それほど厳しいことは言われないのではと少しゆるっとしていたところ、2-1の3面まわしのメンバーに組み込まれ、たちまち足の裏の皮がべろべろになってしまった。大垣市内の高校生とダブルスの練習試合をし、勝つには勝ったが内容が悪いということで、時間無制限のうさぎ跳びをやらされる羽目に…。練習内容の濃さにも驚いたが、合宿所の玉子屋旅館での食事時のこと、先輩や同僚たちの食事の量にもびっくりした。上野先輩などは、丼飯10杯を平気でたいらげっていた。私も先輩から食べておかないと最後まで持たないよと脅かされ、丼で4杯食べた。自分でも不思議なくらいにご飯が食べれた。あれほど一度にたくさんのご飯を食べたのは後にも先にもあの時だけである。苦しかった合宿

の最終日、打上げの飲み会の時には、先輩達から勧められるままにビールを飲み、あつというまに気持ち悪くなって吐いた。吐いたものの中にすき焼きのネギがそのまま出てきたのを今でも覚えている。その後、酔い覚ましに大垣城に散歩に行ったが酔いは容易には抜けず、翌日の昼ごろまで頭がガンガンした。

練習の甲斐あって、その年の早慶戦は負けはしたが6対9での惜敗であった。私はシングル、ダブルスとも勝ち点をあげて敢闘賞をいただいた。秋のリーグ戦の前後くらいから、一時期、上野先輩とダブルスを組ませていただいた。その年の松山のインカレではダブルスに出場。ベスト8にも進めなかったが自分では満足してしまっていた。上野先輩のパートナーとしては実力不足で申し訳なかったと思う。自分としてはこの頃が最も成長できた時期だったと思う。

1年の学年末試験の時だったと思うが、兵頭先生の体育理論は試験用紙に「若き血」の歌詞を書いておけば単位をもらえるという噂を聞いた。先輩たちに聞いてみると、皆そうだという。私は半信半疑であったが、体育会だったらありうる話かもって少し思った。そして無性に試してみたい衝動に駆られた。試験の当日、私は全く予習をしていかなかったこともあって、普通に回答したのでは合格できそうもなかった。少し迷ったが、意を決して、回答用紙は白紙のまま、名前の上の欄に『若き血』の歌詞を書いた。納会の時だったかに兵頭先生に呼ばれて行くと、こっ酷くしかられた。「佐々木君、なんだあの答えは…本当だったらDだぞ!」。結果的には「C」で単位がいただけた。『神話』が正しかったのかどうか、微妙なところである。

のぼり調子だった2年の夏休みを前にして、腹部に今まで経験したことがないような激痛を感じた。横井、桑原君の下宿に助けを求めに行った。休みの日だったので近くの医院で痛みどめをもらってしのぎ、月曜日に武蔵小杉の聖マリアンナ病院に行った。診断の結果は盲腸で即入院、手術となった。痛くなってから愚図愚図していたので、盲腸がはじけそうになってい

て危なかったらしい。傷口も途中で切り足したらしく盲腸にしては随分大きい。退院までに10日もかかってしまった。当然、大垣での夏合宿は出れず、早慶戦も欠場となった。手術の時に傷口を縫った糸が身体にあわなかったらしく、傷口がいつまでたってもジクジクと化膿していた。結局中の糸が全部出てきておさまるまで、1年ほどかかった。バドミントンの勢いもとまってしまい、いつしか、フェイントでごまかすプレーに向かってしまった。

3年になって、梶田、茂木、玉利、清水君らの黄金世代が入部してきた。春先こそ小手先でかわすプレーでごまかせたが、彼らが大学のプレーに慣れるにつれ、だんだんと手ごわくなっていき、やがて追い越された。3年の秋のリーグ戦は例によって立教と優勝を争っていた。誰にも言うてはいなかったが、この試合で負けたら引退しようと密かに決めていた。立教戦に勝てば2部優勝で入替戦に進める。私は桑原君と組んでダブルスに出場した。相手は岡田、村山ペアだったと思う。試合は1-1ともつれ、セティングまでいったが、最後の最後で逆転されてしまった。その瞬間にふっと力が抜けて多分座り込んでしまったのではないかと思う。

その後、勉強に集中したいという理由で、実質的には休部させていただいた。実際のところ、どの程度大変なのかはわからなかったが、工学部に在席されていた先輩たちが皆途中で引退されていたこともあり、どうなるか不安であった。

今手元に「五十年史」がある。中を読み返してみると、同世代の先輩、後輩たちが、輝いた一瞬を生き生きと描いておられる。梶田君が1974年秋の入替戦の模様を書いている。私が4年の秋である。ところが私はこの場に居合わせていなかった。祝勝会にも行った記憶がない。4年間の部活動の最後の最後に有終の美を飾れたかもしれないのに、現役をはなれてしまって残念至極である。もっとも有終の美が飾れたのは桑野君たちが一丸となって努力した結果であって、私が残っていたからって、同じ結果になったとは限らないのだけれど…

3月の卒業式の前日、体育会の卒業式に出席した。その後みんなで飲みに行つて酔いつぶれて、翌日の全学の卒業式は寝坊して参加できなかった。結局私は慶応大学バドミントン部を卒業したのであった。

自分は、プレーヤーとして大した成績は残せなかった、有終の美を飾るチャンスも逃してしまった。さぞや後悔しているのかと思われるかもしれないが、そんなことはない。素晴らしい先輩、後輩たちに囲まれて、大いに刺激を受けた。自分の人生の土台になっているような気がする。

「体育会での経験は、その後の人生の糧となる」この『体育会の神話』は正しいと思う。OB会の飲み会の席で、昔話が始まると、なかなか話がつきない、少なくとも酒の肴としていつまでも楽しめるという意味においては…



《四国OB会だより》



『四国OB会だより』

昭和51年卒

笹岡

Kazuhiko Sasaoka

昨年(2011年)9月から転勤で地元高知に40年振りに帰ってきました。

18歳の時、家族に見送られて高知を出発、宇高連絡船で瀬戸内海を渡り、岡山から夜行列車に乗って上京したことがつい先日のような気がします。現在の住まいは住宅に囲まれています。大学入学当時、周りは田んぼばかりで夏はカエルの声がうるさくて、蛍も家の中に入ってくるような自然環境でした。

そもそもバドミントンを始めたのは、中学校2年の時、友人に誘われて学校のクラブに入部したことがキッカケです。高校時代はインターハイに出ることを目標に練習していたことを思い出します。四国大会では、現在の六大学OB戦でも親交の深い同期の法政大学OBの木下君と試合をした思い出もあります。

インターハイでは、上野さん(S48卒)が勧誘に来ていました。当時は地元の大学か上京するか迷っていましたが、縁があって慶応に合格することができ、迷わず体育会に入部しました。部長は平良先生、監督は岡本圭先輩、主将は上野さん、主務は金子さんでしたが、上野さんには特別可愛がっていただきました。可愛がるということは平常の練習のほかに練習前か練習の後に必ず下田か多摩川までのランニング等特別メニューがあるということです。お陰様で、高校時代もランニングは自信があったのですが(10km35分)、持久力は自信がつけました。

現在、バドミントンはラリーポイントを採用しているので、1試合に1時間以上かかることはありませんが、昔はファイナルになれば長時間かかるのが当たり前のことでした。だから技術と同時に体力もつけることが練習の一環でした。

丁度、入学した時が、創部30周年記念式典を日吉で行った年で、下級生として手伝った思い

出があります。今年は創部70周年ということで感慨深いものがあります。

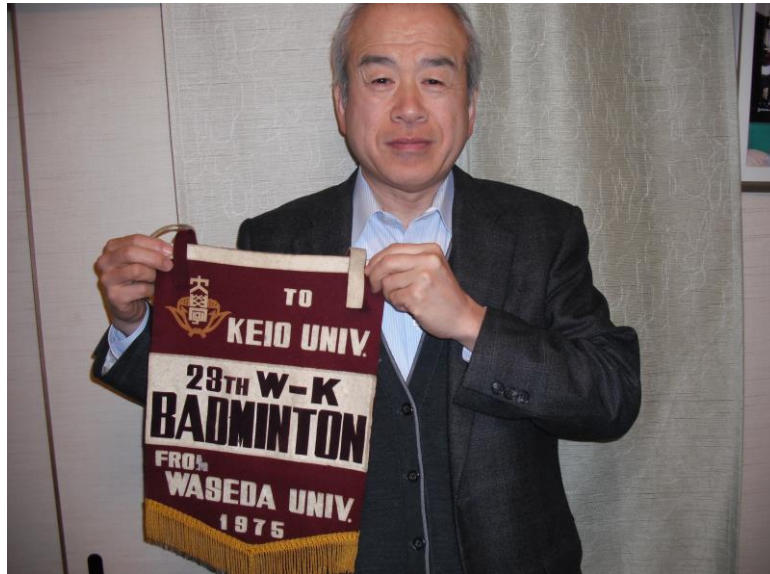
学生時代の思い出の一番は、3年生の時の秋季リーグ戦で2部優勝、入れ替え戦でも青山学院に4-3で勝利して1部に昇格したことです。翌年は春季リーグ1部で試合して初日4-3で日本大学に勝利しましたが、最終的にはポイント差で最下位となり、入れ替え戦でも残念ながら負けて2部に降格しました。その後何年間は強い後輩たちが育って1部・2部の時代がしばらく続くこととなりますが、その頃自分は仕事が忙しくなり10年ほどバドミントンとは疎遠になっていました。

三田バドミントンクラブ会長が岡本先輩から金原先輩(旧姓大島)になった時に幹事長としてお手伝いをするようになりました。昨年の転勤に伴い、急遽、草場新幹事長に記念式典や記念誌の発行業務の他に色々なOB活動の引き継ぎをお願いしたので、大変だったと思います。私も現在仕事柄、休日がなかなか取れませんが、今後も現役の活動を少しでも援助していくつもりです。

現在、四国には松山に昭和34年卒安川通夫先輩、昭和57年卒中村時広愛媛県知事、高松には平成7年卒立田祥章君、高知には昭和59年卒神良一彦君、平成9年卒池内太一君もおりますので、皆で情報交換しながら土佐高校出身の現役4年野村・2年八木・1年高田に続く有望選手の発掘に努力していきたいと思います。

個人的には、卒業後シニアの大会で頑張っている山本先輩・平井先輩を目標に今後も体を鍛えてシニア大会でお会いできるように練習して、出場を目指します。

慶應義塾大学体育会バドミントン部創部70周年おめでとうございます。



《関東地区より》



『関東地区より』

昭和41年卒

山本

Hirohiko Yamamoto

部創立70周年記念おめでとうございます。
私も今年70才になるので、部創立と同時に生まれたと思うと何か運命めいたものを感じます。

さて、私は昨年の仙台での全日本シニア大会出場連続20回の出場となりました。よくまー飽きもせずに続けて出られているなーと思っています。

それと同時に何で今までつつがなく出てこられたのかと考えてみました。

バドミントンを始めたのは中学生の時でしたが、当時は校庭の片隅で風の無い時をねらってやったくらいですから、たいしたこともしていなかったと思います。本格的にやり始めたのは高校に入ってからでした。良き先輩達に恵まれ、平日の練習の時でも先輩達が顔を出してくれて、強烈なトレーニングと練習をやり、何回ひっくり返ったか分かりませんが、おかげでインターハイダブルス優勝という栄冠を勝ち取ることが出来ました。

そして、慶應義塾には一年浪人をして入り、

ここでも良き多くの先輩達に恵まれ、再び強烈なトレーニングと練習をこなしました。

当時のトレーニングメニューのうち、私にとっての恐怖の3大トレーニングは①蝮谷での階段を一人を背負って上がる。②門から記念館までの坂道ダッシュ。③多摩川園前までのマラソン(行った証拠に切符を買ってくる?)でした。

どれをとっても非常にきつく、これも何度も目の前に星が出たのを覚えています。蝮谷や坂道ダッシュはビリになったり、上位から何番目かまでに入らないとやり直しがあり、色々と作戦を立てたりしたものでした。

当時は今のようにスポーツ医学やら、トレーニング方法などがあまりポピュラーではなく、とにかく「根性」、「気合い」でトレーニングをやったものでした。今から思うと随分筋肉に悪いことをしたものだと思います。

加えて春夏の合宿、特に夏の合宿では、1時間の2:1というこれまた強烈な練習をこなし、心技体共に鍛え上げられ、これらの基礎が十分

あるおかげで今まで続けられているのかなーと思います。

慶應義塾に入学するにあたっては、現小杉会長他、当時4年生であった渡辺さん、北田さん、関野さん他多くの先輩の方々の熱意が私の気持ちを突き動かしたのです。実は当初私は他の大学を志望しており、記憶では夏ぐらいまではそちらの方に行く決心をしていたと思います。そこに前述の方々が熱心に塾に入ることを勧めて下さり、その熱意と真剣さに心を動かされて言わば逆転で塾受験をしました。が、不勉強がたたりの見事に不合格となり、これでは皆さんに申し訳ないという一心で懸命に浪人生活を過ごし、翌年晴れて合格することが出来たわけです。

現在も現役とOB/OGは一体となって高校生への勧誘活動をしています。是非これは続けてもらい、塾の良さを説いて一人でも多くの高校生が我々の仲間になって欲しいと思っています。

ただ塾にはスポーツ選手推薦制度が無く、とにかく入学試験はクリアしてもらわないとなりません。でもこれが大切なのです。大学生活の4年間は長い人生の中では一つの通過点にしか過ぎません。その先に社会生活が待っておりここでそれぞれの人の本当の真価が問われるのではないかと私は思っています。

従って塾でしっかり教養を身につけ立派な社会人になって欲しいと思うわけで、そのためには最低限の学力は持っていなければなりません。塾の卒業生の社会での活躍は素晴らしいものがあり、世の中で堂々と活躍するためにも文武両道は大変大切なことです。部で培った体

力、知力、団体行動力、組織の中での自分の能力の発揮の仕方等々、部生活の4年間の苦労は社会に出て多に役に立つことばかりです。現役諸君は一つ一つを確実にこなし、しっかり身につけて自分のものにしていって欲しいと思います。

最後に私が今でも役だっていることの一つを紹介します。

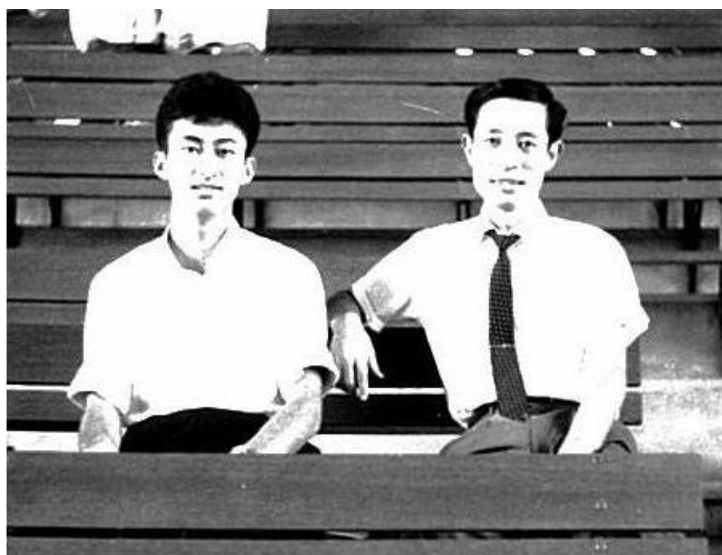
私の在学中パートナーをして頂いた轟先輩の一言が今でも忘れられず、ことある毎にそれを思い出し、実践しています。

それは「とにかく言われたことをやってみろ!」という言葉です。

人から何か指図をされたり、アドバイスを受けたとき、人はやる前にまず考えてしまいます。その結果として言われたことをきちんと出来なかったり、あるいは反発したりすることが多々あります。そういった態度を私が取ったときに言われた言葉です。言われたとおりにやってみる。出来なかったら出来るまでやってみる。その上で初めて自分に合ったものかどうかを判断する。やりもしないで勝手に決めるなどということです。私は卒業後の多くの場面でこの言葉を思い出し、実践し、より良い結果を得たと思っています。

今我が部は再び「陸の王者」に復活すべく着々とその手を打ち、前進しています。70周年と言う素晴らしい時を迎えて、みんなで更に結束してその実現に向けて努力して行くことを確認し合い頑張ろうではありませんか。

以上





現役のみなさんへ

ラケット1本の人生 (夢を追いかけて)

昭和45年卒

平井 克 *Katsuhide Hirai*

70周年おめでとうございます。大学を卒業して44年ほど経ちますが、バドミントンの魅力に憑りつかれて、未だに競技と指導のバドミントン人生を送っている私です。私にとって感動した体験話を少し紹介したいと思います。現役学生達にとってはアドバイスとはならないでしょうが、変わった先輩のただの自慢話と笑止して読んでもらえれば幸いです。

(慶應時代) 東日本学生大会 ダブルス3位

2部から1部昇格しリーグ戦で1部でプレーが出来たこと。リーグ戦で早稲田と歌のエール交換したこと。そして早慶戦は忘れられない思い出になっています。特に、大学4年生の東日本大会(仙台)で、ダブルス3位になれたことは、卒業後もバドミントン競技を続けたいと私の人生を変えた大会でした。また、塾高や埼玉県の女子高校でのコーチ経験は指導の大切さと楽しさも学ぶことができました。そして、日吉での練習後、週2回三田の慶應外語学校で、なぜかインドネシア語の勉強したものでした。あまり授業に出なくても、毎日がバドミントンしていても、何とか卒業できた古き良き学生時代でした。(笑)

(20代) 実業団(カワサキラケット時代)

全日本実業団団体優勝、全日本実業団Mix優勝、ダブルス準優勝、全日本社会人Mix準優勝

世界選手権大会(トーマス杯)がインドネシア(ジャカルタ)であり、少しはインドネシア語が出来るといのでアジアの選手契約の仕事がまかせられ、1人きりで2カ月間の出張。香港、台湾、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアでのナショナル選手や監督、コーチとの交流は日々新鮮、感動。世界のバドミントンの実力と魅力を肌で感じ、また、ジャカルタでのトーマス杯(世界男子団体戦)、観客1万人の中でのインドネシア選手への国民の応援は大歓声、大熱狂、国技という異様な雰囲気を経験することが出来ました。素晴らしいプレーにはBAGUS(バグース)、BAGUSの連呼。忘れない言葉になっています。

日本対中国(日本各地)、インドネシア対中国(シンガポール)、韓国対中国の試合(ソウル)3つの試合はただ勝ち負けを争う大会ではなく、ともに中国が国交樹立の為のピンポン外交な

らぬ羽毛球外交。国際連盟に加入していない、幻の世界チャンピオンといわれた中国が初めて、レベルを世界に見せつけて、世界を驚嘆させた大会。私も3つの大会の現場にいて、大感動を覚え、いまでも鮮明に頭の中に記憶している。交流した中国選手からの手紙の最後には必ず、中日友好万歳。政治とスポーツの関係を考えさせられる体験でした。

世界選手権(ユバ杯)。東京都体育館 観客1万人の中、日本とインドネシア(女子団体)の決勝戦の主審をすることになった。当時、国際審判制度は日本に無く、日本協会審判部役員として主審する羽目になった。選手とは全く違う緊張と不安で一杯だったが、いざ、1万人の観客の中での主審体験は日本の勝利とともに、何故か快感と感動に変わっていた。

(30代) 全日本社会人大会(30代 準優勝)

相沢マチ子エンタープライズ(A.M.E)設立。当時、Yonex勤務の世界ダブルスチャンピオンだった相沢マチ子選手の夢はレッスンプロとして日本のバドミントンを普及したい夢があった。2人で会社を立上げ、日本のバドミントンプロ第1号の誕生を企画し メーカーと3年間のプロ契約をして、日本各地や海外での講習会。多くの人々の大歓迎は忘れない思い出になっている。

小泉信三スポーツ基金。当時大嶋OB会長より慶應バド部の海外遠征への依頼があり、韓国ナショナルチームと慶應との海外遠征を企画し大学に提案して許可がおりた。大嶋会長とともに学生を連れて韓国遠征して韓国ナショナルチームとの交流試合が実現。結果は1勝1敗。学生にとっては素晴らしい思い出の海外遠征体験になった。今や、その韓国はバドでも男女ともオリンピックのメダリストの国になっている。

韓国としての初海外遠征。親友の韓国ナショナルコーチMr. Kimの依頼で、私と韓国女子(4名)が当時の世界選手権(全英OPEN大会)、スウェーデンOPEN、デンマークOPEN大会と1ヶ月以上の遠征の6人旅。結果は全英、デンマーク、スウェーデン大会でのシングルス優勝は韓国が初めて世界デビューした記念の年1981年。全斗煥大統領からの祝いの電話もあり。帰国しての

パレードあり、韓国を再認識した体験だった。その後、男子も世界レベルになる。

(40代, 50代) 全日本シニア(複、Mix優勝) 全日本教職員大会(単複優勝)

慶應大学と東京女子体育大学、両大学よりバドミントンの授業の依頼があり、非常勤講師を引き受けることになった。慶應大と東京女子体育大の一般学生へのバドミントン授業。もう18年間、現在でも先生業も続けている。東京女子体育大学の学生にはシドニー、北京オリンピックでの金メダリストや銀メダリストもいる。

「先生、メダルを取ったよ!」

と報告に来る学生に私も嬉しく、感動を覚える。また、毎年、慶應の学生の授業の感想レポートには学部、学年を超えて友達が出来たと必ず書いて感謝してくれることがとても嬉しい。

ゲストハウスの実現。8年前、全国の大学生や高校生が東京での遠征用の無料宿泊所(ゲストハウス)を国立市内に実現。春、秋リーグ期間にいつも利用する筑波大学チーム、全国の高校生、実業団チーム、小、中学生も利用。昨年の東日本大震災後、宮城県よりの聖和高校の皆さんが東京に遠征され宿泊された。地震もなく、ぐっすり眠れて、好きなバドミントンも出来て、嬉しいと生徒さんに感謝してもらったことは、とても印象的であった。

(60代) 全日本シニア大会(複、Mix優勝) 全日本教職員大会(単複優勝)

東京女子体育大学の監督業。38年間、部員にバドミントンを教え、卒業後、中、高校の先生になってもらう。そして教え子たちがバドミントンの顧問になり、次の世代の育成をしてもらう。私が体育大学の指導を始めたころの夢は、今も続いている。実業団チームで頑張るOG達もいるが、やはり、先生なってもらいたい。昨年

は2人が実業団に、2人が先生に合格。

現在、関東学生バド連盟顧問、東京都学生バド連盟役員、日本教職員バド連盟役員として、学生達といつも接しています。競技面と会計面、大会企画、大会運営などの問題や課題はいつもありますが、各大学の部長先生や監督さんよりの多くの提案、意見を頂き、反映されるように、皆さんの協力をいただき、良い方向へと改革中&奮闘中です。

最後に、慶應の学生達にアドバイスするとしたら、体育会バドミントン部員であることはOB、OG達300人以上が君たちのサポーターであることを知ってほしい。学生はOB、OG達と知り合うことで、教えてもらうことが多く、貴重な体験や経験を聞き、これからの人生の糧や栄養にして自分達の夢を追いかけてほしい。積極的にOB、OG達に近づこう! 語りかけよう! 自分達の夢を追いかけよう! そして、OB、OG達からも好かれる君達であってほしい。

From 君たちの応援者の一人より



現役時代回想録

昭和50年卒

宮地 Masayuki Miyachi

「我がバドミントン部は創部70周年を迎えるんだってな。」

「ああ。70年って一言でいうけど、すごい歴史だよな。戦前からあるんだもんな。」

「森友先輩(昭和19年卒;故人)や吹野先輩(昭和21年卒;故人)が活動されていた頃からだろ。何と言っても日本バドミントン発祥の地

は慶應だからな。歴史の重みというか伝統の重さを感じるね。」

「ところで、俺達が在学中(昭和51~54年)の頃の思い出話をちょっと語ってみないか。」

「ああいいよ。でももう随分前のことだけど、お前覚えてるのか。」

「ああ、まあな。俺は結構昨日のこのように

覚えているよ。」
「そうか、それじゃあ、とりあえず1年生（昭和51年）の頃はどんなだったっけ。」
「まずは世相から行こうか。」
「ああ。この頃は郵便代が50円、はがきが20円の時代。国鉄（現JR）の初乗りが30円だったことを今でも覚えているよ。」
「そんなに安かったのか。」
「ああ、政局は福田赳夫内閣が発足、ロッキード事件が発覚して田中角栄が逮捕されたんだよな。」
「田中角栄ってあの田中真紀子さんの親父か？」
「ああ。福田赳夫もあの福田康雄の親父だよ。スポーツでは体操のコマネチがモントリオール五輪で10点満点を連発した年でもあったな。」
「今じゃありえないね、10点満点なんて。」
「一世を風靡したあのピンク・レディが『ペッパー警部』でデビューしたのもこの年だったよな。」
「確か、ピンク・レディ派とキャンディーズ派に分れたよなあ（笑）。ま、いろいろとあったんだな。世相はこれくらいにして、我が部ではどんなことがあったっけ？」
「平良先生（故人）が部長先生、監督は大嶋俊次先輩（昭和43年卒；故人）だったね。」
「平先生か！懐かしいな。残念ながら2年ぐらい前に亡くなられたよな。」
「ああ。平先生は確か関東学連の会長職も長く務めていらっしゃったよな。温厚だけど熱心だったよな。そんな方だから卒業してから結婚式の主賓や来賓として平先生にご参列いただいた部員は数多くいたね。俺もそのうちの1人だけど。」
「ま、そうだろうな。これも平先生のご人徳だろ。」
「ところでこの年は当時としては長い慶應バドミントン部の歴史の中でも屈指と言っても過言ではないくらい強かった年だよな。」
「そういえば、そうだったな。」
「4年生には主将の梶田さん、副将の茂木さん、3年生には宮崎さんや柳本さん、もう1人梶田さんもいたよなあ。2年生には木村さんや森下さん、橋本さん。我々1年生にもインターハイのチャンピオンの諏訪がいたよな。」
「こんな豪華なメンバーだからさぞかし強かったんだろうな。」
「そうなんだよ。関東学生選手権の男子シングルスAブロックで確かベスト8入りをかけて梶田さんと茂木さんが激突するなんてことがあった。」

「ベスト8入りをかけて内輪の試合があったのか。そりゃあすごい！！」
「何しろ、ベスト4に梶田さんの他に、3年生の宮崎さんも入った。」
「ということは上位4人のうち2人が塾だったということか？」
「ああ、そうなんだよ。ダブルスだって梶田さんと宮崎さんが組んでベスト4に入ったし、練習ではこの梶田・宮崎ペアよりも強かった柳本さんと木村さんのペアがベスト8。4年生の清水さん、玉利さんのペアがベスト16と慶應躍進を他校に強烈に印象づけたんだ。」
「夢のようなチームだったんだな。」
「そうなんだよ。」
「当然早慶戦でも圧勝したんだよな。」
「・・・・・・」
「何だよ、急に黙り込んで。」
「いやあ、あまり触れてほしくなかったんだけど、下馬評では慶應圧倒的に優位といわれていたんだけど、実は6対9で負けてしまったんだ。」
「なっ何だと！？」
「試合会場が早稲田の記念会堂だったということもあり、ダブルスでまさかの4敗を喫してしまい、シングルスでもファイナルセットまでもつれた試合はほとんど早稲田に持ってかれてしまった。」
「さぞかし雰囲気悪かったんだろうな。」
「ああ。よく野球では早慶戦は弱い方が勝つというジンクスがあるだろ。この年はそのジンクスがバドミントンにまで伝染してしまったような印象だったんだよなあ。梶田さんが男泣きしていたのを今でも覚えているよ。」
「そうか。ところで、この年のトピックスってないのか。」
「部史上初の海外遠征を韓国でやったのは確かこの年だな。」
「夏合宿はどこでやったんだ？」
「長野県の更埴市というところだよ。合宿最終日の打ち上げコンパで当時コーチの鈴木英夫さん（昭和47年卒）を布団蒸しで襲ったら、鈴木さんにあとでこっぴどく叱られたのを覚えてるよ（笑）。そういえば早慶戦直前の日吉合宿にも鈴木さん一緒に泊まり込んだんだけど、我々1年生が誰も鈴木さんを朝起こさなくて、というより起こし忘れて、鈴木さん会社をサボっちゃったこともあったよなあ（笑）。」
「また怒られたのか？」
「いや、鈴木さん、笑い飛ばしてた。」
「よかったな。ところで、他には何かないのか。」

「女子の中村（現姓茂木）百合っぺが新人戦のシングルスBブロックで見事優勝したのは一服の清涼剤だったかな。」

「1年生のときの思い出はこれくらいにして次は2年生（昭和52年）のときを語ろう。」

「ああ。この年はスポーツでは何と言っても巨人の王がハンク・アーロンの通算ホームラン記録（756本）を抜いて文字通り“世界の王”になったことは特筆されるよな。」

「そうかこの年だったのか。」

「キャンディーズが突然『普通の女の子に戻りたい!』と宣言して世間をあっと言わせたのもこの年だったな。でも後に復帰したから『お別れコンサート』は一体何だったんだってことだけだね。（笑）」

「そういえば同期の中村百合っぺ、山本（現姓波多野）美智子、大関（現姓川村）栄子の3人がよく合宿の最終日の打ち上げコンパでキャンデーの歌まねをやってたのを今思い出したよ（笑）。」

「そうだったな。塾の商学部で入試漏えい事件が発覚したのもこの年だね。」

「あの事件はホント大変だったな。社会問題にまで発展したもんな。ところでこの年の我が部はどうだったんだ？」

「この年の特記事項は何と言っても早慶戦に勝ったんだ。」

「えっ!？」

「早慶戦に勝ったんだよ。この年は前年と違い早稲田有利という下馬評だったんだけど、それを覆して11対4で圧勝した。特に3年生の木村さんとペアを組んだ副将の柳本さんに意地を見たね。」

「どんな意地だ？」

「早稲田の亀谷さん、渡辺さんの3年生ペアとのダブルスは壮絶だった。4人のうち柳本さん1人4年生だったので、まさに先輩としての意地が勝たせた試合だったね。柳本さんはこの勝利の勢いのまま、茶谷さんとの副将戦でも見事に勝利し、おまけに最優秀選手賞まで受賞してしまった。茶谷さんに勝ったのも初めてじゃないか。」

「そうか。男の意地はカッコいいねえ。」

「でもなあ、秋のリーグ戦での早慶戦は惜しくも敗れた。でもこれは部史に残るくらいの壮絶な試合だったんだ。」

「どんな試合だったんだ？」

「2単3複が終わり残るは2単のみ（当時は3複4単）。塾は2勝3敗だったんだが、第3シングルスで登場したのが塾は主将の宮崎さん、早稲田は亀谷さんの両エースがここで激突したんだ。」

「結果はどうだったんだ？」

「あの絶対的エースの宮崎さんでもここで負けたらおしまいと思うと体が思うように動かなく、第1セットは亀谷さんに先取されてしまった。」

「そうか。宮崎さんでも堅くなるのか。」

「ああ。でも宮崎さんの偉大なところは後の2セットを取ってしまったことなんだ。」

「すごい精神力だな。」

「ホントそう思うよ。この試合がいかにも壮絶だったかは試合後に亀谷さんが何と“急性胃痙攣”を発症し救急車で病院に搬送されたんだ。」

「えっえ〜!? そうなのか。」

「ああ。胃痙攣で苦しんでた亀谷さんを俺は目のあたりにしたけど、想像を絶するもたえ方だったよ。」

「そうか。それはつらかったろうなあ。ところで、第4シングルスはどうなったんだ？」

「塾は同期の諏訪、早稲田は茶谷さんが対戦し、諏訪は第1セットのセットポイントを握ったまではよかったが、残念ながら逆転負けを喫し結局第2セットも落とし、塾は負けてしまった。宮崎さんの勝利で流れは塾の方に傾いていたからな。勝利の女神にそっぽを向かれてしまったよ。」

「そうか。それはとても残念だったな。」

「ああ。」

「その他にトピックスはないのか。」

「余勢を買って、宮崎さんはインカレでも見事準優勝。でも本人は準優勝の喜びより優勝できなかった悔しさの方が大きかったみたいだ。」

「そうか、宮崎さんはホントすごい人なんだな。」

「ああ、宮崎さんの全盛期のプレーを見ることができたのは今更ながら俺も幸せだよ。床面すれすれの打球に対してさえ体を精一杯伸ばして取りに行こうとしていたし、何しろ勝利に対する執念は他人と違っていたからな。今の現役諸君に見せてやりたかったね。」

「なるほどな。」

「それと同期の古川公平が1年生の五十嵐康と組んで関東学生選手権のBブロックダブルスで見事優勝した。」

「そうか、それはよかったな。」

「ああ。彼は今年にかけるといって春合宿から意気込みが違ってたもんな。結果が出てホントよかったよ。」

「なるほどな。よかった！よかった！それでは次は3年生時（昭和53年）に話題を移すか。」

「ああ。この年のトップ記事は何と言っても成

田空港の開港だろう。」
「そうか、成田の開港はこの年か。地元住民の反対運動ですったもんだしたよな。」
「ああ。スポーツでは“江川事件”だろ。この事件はホント世間の目をくぎ付けにしたよな。国会でも取り上げられたぐらいだからな。」
「巨人も“空白の1日”とはよく考えたもんだ。この事件がきっかけで後のドラフト制度を根幹から変えたからな。それはさておき、我が部はどうだったんだ？」
「宮崎さんという絶対的なエースが卒業して小粒化は否めなかった。リーグ戦ではまたしても1部最下位。中央大の1強と他大学の5弱と言われていたが、現実には“1強4弱+1最弱”という印象だったな。」
「そうか。厳しい戦いを強いられたんだ。」
「ただ青学大との定期戦（入替戦）では劇的な勝利を収めたんだよ。」
「どんなふうなんだ？」
「2単1複が済んだ時点で0勝3敗。文字通り崖っぷちに追い込まれたんだ。」
「そこから逆転したのか？」
「ああ。しかも第2ダブルスに出場した同期の牧弘之と2年生の藤田博之のペアが青学の滝本さん（4年）と林田（3年）のペアに勝っちゃった。この勝利が起爆剤となり、一気に大逆転したんだ。」
「林田って確か3年前のインターハイシングルのチャンピオンだよな。」
「ああ。その林田に牧と藤田のペアが勝ったんだよ。」
「それはすごい快挙だったんだな。」
「快挙といえば、4年生の橋本さんが札幌で行われた東日本インカレでベスト4に入ったことも特筆されるね。」
「それは素晴らしい。橋本さんは東日本インカレを目標に地道にコツコツと練習していたもんな。」
「特に準決勝での宿敵早稲田の石黒（3年）との死闘は今も語り草になってる。」
「どんな死闘だったんだ？」
「ファイナルセットのセティング4対4から残念ながら惜敗した。石黒は額を床で切りながらの勝利だったんだ。」
「そうか。石黒は敵ながらあっぱれだな。」
「石黒はこの勢いに乗って決勝でも勝ち、優勝してしまったよ。」
「ということは橋本さんも一つ間違えば優勝できたかもしれないんだな。」
「そうだよな。それともうひとつ。リーグ戦で一こまだけど、早慶が戦う時は試合前にコ

ートに整列してエール交換をやったんだ。早稲田大学校歌と慶應義塾歌をそれぞれ歌い、“フレーフレー早稲田”と“フレーフレー慶應”をやったんだ。」
「他のコートに他大学の選手たちはどうしていたんだ？」
「試合を開始していたけど、試合中でも何事かと異様な目でこっちを見てたね。」
「そうだな。想像しただけでも異様な光景が浮かぶよ。」
「滑稽だったけど、それでも俺達は気にせず誇りをもってやったね。」
「なるほどな。分る、分る。ところでこの頃の下級生はどうだったんだ？」
「1年生に中村時広（現愛媛県知事）や加藤幸司（現女子監督）等、元気で活きのいい連中が入部してきて下級生から随分部を盛り上げたな。」
「なるほどな。じゃあそろそろ最後の1年（昭和54年）の話をしようぜ。」
「この年は確かインベーダーゲームが爆発的な人気を博した年なんだよな。」
「そういえばほとんどの喫茶店には必ず置いてあったな。今思うと、昨今のテレビゲームブームの走りの年だったのかもしれない。」
「ああ。それと第2次オイルショックで“省エネ”という流行語が生まれたのもこの年だね。」
「そうか。確かNHKテレビの放送が毎日夜の11時で終了していたのが思い出されるな。ところで、我が部の方はどうなんだ？」
「昭和50年から続いた大嶋監督が退任し、鈴木英夫新監督が就任したね。そのため、大嶋監督の勤務先の西河原病院での宿直のバイトもなくなった。」
「何だ、それ？」
「部費稼ぎのため、宿直のバイトを男子部員が毎日交代で行っていたんだよ。」
「ふ～ん、そうなのか。」
「この病院に泊まった翌朝はいつも寝不足だったよな（笑）。」
「なるほどな。そんなじゃみんな嫌がったろ？」
「ああ。特に試合前になると下級生は上級生に替って宿直やらされてたな。加藤なんか1年生の時はしょっちゅう宿直やってたような記憶だ（笑）。」
「そうか。下級生は可哀想だったんだ。ところで、大嶋監督の思い出話は何かないのか。」
「大嶋監督はクールで厳しかったけれど、部員全員に声を掛けてくれた方だったね。」
「早く亡くなられたのはとても残念だね。いつのことだ？」

「確か平成11年頃じゃなかったか。俺は東海銀行勤務時代の昭和62年。ロスアンゼルス支店に着任する前日、何故か大嶋さんに電話したんだ。『明日日本を出発します。しばらく不在しますが宮地は健在です。』と伝えたんだが、今思うとこれが最後の会話だったんだよなあ。」

「そうかあ。」

「ところで我が部の話に戻すと、昨秋の青学との定期戦（入替戦）に敗れ今年は2部からのスタートとなった。春休みは下級生のレベルアップを課題として相当厳しい練習を続けたが、春のリーグ戦は4位とすぐに成果は出なかったな。」

「そうか。」

「それでも秋のリーグ戦は2位に上昇したし、若い力が確実に伸びてきていることは実感できたね。特に山形で行われた東日本インカレでは主将の諏訪と五十嵐（3年）のダブルスがベスト8入りをかけて早稲田の水内（4年；主将）と平野（3年）のペアと激突した。惜敗したけど手ごたえはあったね。」

「なるほどな。」

「ただ特筆すべきは、男子とは裏腹に女子が春は2部で優勝。入替戦にも勝ち、19年ぶりに1部に昇格したことはこの年の快挙だったね。特にOGの皆様はととても喜んでくれたよ。」

「そうか、それは快挙だったな。」

「ああ、4年生のエース中村百合っぺをはじめ、同じ4年生の山本美智子や大関栄子、3年生の後藤（現姓石井）恭子に加え、2年生の松田

（現姓松尾）有代や篠田（現姓伊能）素子、1年生の笹野（現姓荒木）尚子と新旧ががっちりかみ合っただけの優勝だった。もちろん早慶戦にも快勝だったね。」

「男子の早慶戦はどうだったんだ？」

「4対11で敗れたけど、前年が2勝しかできなかったことを思えば善戦したと思う。早稲田は昨秋のインカレ団体戦で優勝し、当時としては早稲田バドミントン部史でも最強時代だったからな。特に我が部は春休みから毎日長時間の厳しい練習をこなしてきたことを思うと進化したと思うよ。」

「そうか。」

「主将の諏訪は最後まで意地を見せてくれて因縁の水内との主将戦では見事勝利を収め、直接対決でも確か2勝1敗と勝ち越したはずだ。」

「主将戦というと毎年ドラマがあるけどこの時もそうだったのか？」

「ああ。勝敗は決していた後だけど、素晴らしかった。諏訪は敢闘賞を受賞し、1年生の時の新人賞以来2度目の受賞となったな。」

「そうか。」

「俺も早慶戦のレセプションの後で、4年間の苦しかったことやつらかったことが走馬灯のように蘇ってきて、思わず人目をばからず号泣したことを今思い出したね。」

「そうかわかった。しみりしたところでこの思い出話もこの辺でお開きとするか。」

「ああ。最後に慶應バドミントン部創部70周年おめでとう！そしてこの伝統は後輩たちにしっかりと引き継いでもらおうな！」





創部70周年にあたって～社中協力とこれから～

平成6年卒

安達 憲瑞 *Katsuhide Hirai*



この度、創部70周年記念誌への寄稿依頼を受けてみて、あらためて我が部の歴史の古さと70年間脈々と築かれてきたその歳月に重みを感じる。そして母校慶應義塾に目を向ければ、創立は1858年、我が部の創部よりもさらに遡ること84年も前のことである。

塾創立当時に思いを馳せつつ、たまたま半年ほど前、ふと送られてきた冊子『塾』の見開き「演説館」に書かれた『「社中」という思想』（井田良常任理事）という文章に目が止まったのを思い出した。そこには、「慶應義塾では学生・生徒・児童を塾生と呼び、卒業生を塾員と呼んでいるが、これに教職員をあわせて一つのカンパニーの構成員であり、福澤先生はこれを『社中』という言葉で表現されていたこと、また慶應義塾を支え発展させてきた原動力は、社中協力の思想であること、そして、社中各員にとり『慶應義塾』は懐かしい心の故郷であるばかりでなく、その協力によりさらに進化・発展させていきたい皆の共有物である」等と書かれていた。

読んでいると何かすっと腑に落ちるものがある。塾150年の歴史に限ったことではなく、我がバドミントン部70年の歴史にも「社中」に似た根幹なるものが存在し、それを基礎として新たな歴史が積み重ねられてきたのであろう。私が現役時代の頃にはよく理解できていなかったが、大学・塾高・女子高・普通部・幼稚舎を含めた塾全体のバドミントン部が互いに繋がり合って運営されていることや、OB会が現役をきちんとサポートしてくださっていることもその証だと思う。社会に出てからは、バドミントン部OB会はもちろんのこと、所属する会社の三田会でも「慶應という繋がり」をもとに仕事上のアドバイス等をいただくことが少なくない。つい最近、早稲田大学出身の上司に「正直に言って、慶應のネットワークは羨ましい」と言われたが、もちろんそれが初めてのことでない。まさに慶應義塾の目に見えない「原動力」と言えるものである。

この様に思いをめぐらせることで、あらためてバドミントン部員であり塾員であることを誇りに思えたが、我々はこの様な素晴らしい財産を共有している一方、同時に果たすべき義務もあるように感じる。社中協力で進化・発展させていくということは、つまり「誰か」や「何処か」で区切れるものではなく、綿々と継続してゆかなければならないということだ。「社中」にはもともと「神楽を伝承する団体」という意味もあるそうだが、我々一人一人が、綿々と受け継がれてきたものに対して責任をもって次代に繋いでゆく、言い換えれば伝統を受け継ぎ自ら未来を創ってゆかなければならないということも忘れてはならない。

さて、少し視点を変えてみると、我が国は、塾が創立した1858年の当時は、幕末～明治維新の激動を、またその約80年後、我がバドミントン部が創部した1942年からは戦後の激動を経験し70年が経過した。歴史は繰り返すというが、ちょうど70～80年という期間で考えると、これからの70～80年もこれらに匹敵する様な激動が待ちうけているかもしれない。少なくとも2011年は未曾有の大震災を経験した。今後、本格的に復興に向けた活動を国をあげて進めていく必要があるが、そのためにも財政政策やエネルギー政策等をはじめ世の中が大きく転換する可能性がある。我々はこの様な転換期に国を支えると同時に、社中の一員として我が部と塾を支え、そして次の時代へ繋いでいく責任を担っていくことになるだろう。

話が少し大きくなりすぎた。しかし、どんな物事に対峙するときでも、「大事」を成し遂げ

るためには常に一人一人が目の前の課題や足元でできることを着実にやり、一つ一つのパーツはたとえ小さくともそれを着実に積み上げていくことが重要である。我々OBもそれぞれの分野でそれぞれの責任を果たしていこう。我が部の現役選手達も高い目標を掲げ日々努力していることと思う。一朝一夕でできることは少ないが、目の前のことを焦らず着実にやり、未来に繋げていってほしい。現役の塾生にも誇りを持って頑張ってもらいたいと切に願うとともに、さらなる奮起を期待したい。

《海外より》



中華人民共和国 北京より

昭和61年卒

永井 直

Naohiko Nagai



慶應義塾体育会バドミントン部70周年おめでとうございます。

私が塾のバドミントン部に入部させて頂いたのは1982年4月であり丁度30年前のことになります。

30年前を思い出せば、苦しかった合宿、日吉の並木ダッシュ、クロカン、キスギダッシュ(ほんの一部の方しか判りませんね・・・)、1・2部入れ替え戦での敗戦(当方のシングル敗戦で決着がつき、それ以来塾バドミントン部は関東1部リーグから遠ざかっています。責任は重いですね。)と何故か苦しいことばかり。嘘かと思うでしょうが今でも慶早戦の勝負が掛かったシングルで早稲田のライバルに追い詰められる夢を年に何回か見ます。

何故苦しい思い出しか思い出さないのか自問自答してみたのですが、それは人間苦しんだ時の経験こそその後の人生の糧になるからなのではないか、などと思う今日この頃です。

さて、現在私は中国北京で仕事をしています。

二度目の駐在で合計7年当地に住んでいます。こちらでは「バドミントン」などという言葉は全く通じず、「羽毛球」と呼びますが、ご想像の通り大変ポピュラーなスポーツです。会社帰りのサラリーマン、街を歩く学生さんなどラケットケースを持っている姿を良く見かけます。

街中に「羽毛球館」なる専用体育館も数多くあり、流石「本場」中国です。

日本では殆どやる機会はないのですが、こちらでは日本人会のバドミントン同好会などでたまにプレーしています。極まれに中国人や他の国の人達とお手合わせ願ったりするのですが、「本場」中国の方の誇りと意気込みは相当なもの。間違えて？日本人が勝ったりすると、翌週にはオリンピック選手を連れてきて日本人を叩きのめすという手の入れ様。人間にとり「誇り」は重要ですね。

前述の通りバドミントン部で色々な苦しい思いもしたのですが、その代わりに私も大きな「誇り」を手に入れたことを忘れていました。「厳しい練習に耐え、慶應義塾の代表として戦った」という「誇り」です。これは何百人ものOB、OGの方も同じ思いなのではないでしょうか。これは70年、そしてこれからも不変の事実だと思えます。

最後に、現役の方が今後もこの「誇り」を胸に、バドミントンの練習、慶應義塾の勝利に邁進されることを祈っております。



ベトナム ハノイより 70周年部誌寄稿にあたって

昭和61年卒

服部 勲

Isao Hattori



し、セパタクローでは世界一になっています。
残念ながらバドミントンは世界一になって
いませんが……。



創部70周年おめでとうございます。

まず初めに、60周年の寄稿に続き70周年の寄稿をさせていただける事を大変感謝いたします。あれからもう10年も経ったのかと驚いていると同時に、10年前はロンドンから寄稿させていただき、今回はハノイからと、学生時代には海外なんてまったく考えていなかったことが、起きてしまったなあと感じています。

先日帰国した際に、東京で同期の佐藤、木村、渡邊、永井（旧姓臼井）と食事をしましたが、私が海外で生活するなんて誰一人として予想できなかったと思います。

さて、今回の寄稿では、あまり皆さんがご存じないベトナムを少し紹介させていただこうと思います。

ベトナムというと「常夏」のイメージがあるかと思いますが、ベトナムは南北に2000km

と細長い国土で、私が住んでいるハノイは中国との国境に近く、南のホーチミンとは違い、三方を山に囲まれ、夏は暑く、冬は涼しい気候となっています。冬は最低気温で5℃、夏は最高気温で45℃にもなりますが、年中湿度は70%を超えています。一方、ホーチミンは年中気温は30℃を越えています、冬は乾燥しており、湿度も40%くらいになります。

ベトナムでの人気スポーツはなんと言っても、サッカーです。やはり、ボールがあれば、どこでもやれるというのが、人気の理由かと思えます。日本と違って、プレミアリーグ、ラ・リーグなどは生放送で見る事が出来ます。人気のチームは、バルセロナとマンUですね。

次に人気があるスポーツはなんだと思えますか？……バドミントン、エアロビ、セパタクローです。

エアロビでは女子で世界大会2位もいます



上の写真は、普段見かけるバドミントンをしているベトナムの人達です。どうですか？建物の間のスペースや公園にある道を使って、誰でもどこでもバドミントンをしています。ほとんどの人が、屋外でバドミントンをしています。ハノイ市内で体育館を探してみたのですが、国立競技場以外に体育館というものは存在していませんでした。大学の構内にも体育館はありません。人気があるとはいえ、世界一を輩出できない理由はこの環境のせいと言えるかも知

れません。学生時代、記念館というとても恵まれた環境でバドミントンに打ち込めた自分はなんて幸せだったろう。その恩恵にベトナムに来て初めて気がつき、恥ずかしい気持ちになりました。現役の皆さんも、自分達が良い環境でバドミントンに打ち込めるということに、是非感謝して精進してもらいたと思います。

ところで、セバタクロールはご存知ですか？羽根つきの羽より大きな羽を足を使って蹴り合うスポーツです。



↑ オーバーヘッドキックの瞬間（下は歩道です）



硬い地面の上で、普通にオーバーヘッドキックをしている姿を見てびっくりしました。世界大会は体育館で行なわれるので、彼らは恐れることなくオーバーヘッドなどの大技を出せるのでしょう。その結果、世界一になったのかもしれない。

スポーツの上達には、良い指導者・環境それと、プレイヤーの熱意と向上心です。ベトナムの人たちに比べて良き指導者（諸先輩方）がいて、環境も整っており、あとは皆さんの熱意と向上心があれば、上達するはずです。

私自身は記念館へ足を運ぶ事はなくなってしまいましたが、毎日届けられるメールを楽しみに見ております。70周年を迎えるにあたり、南の国から皆様の活躍を期待しております。